

篠瀬大輔 博士学位申請論文（課程博士）

『中世東国の地域と環境』 審査要旨

### 論文の内容の要旨

本論文は、中世後期の東国における地域の成り立ちを、地域認識、政治的重層性、近世社会との連続性という三つの観点から解明しようとしたものである。そして、いずれの章も自然環境を媒介にしてその視点から社会・政治を見るという方法に徹している。

第一部は「利根川をめぐる関東の地域構造」と題して、「中世上野の地域構造と利根川」、「戦国大名の国境政策と利根川」、「中世関東の地域認識と利根川」の三章に分け、利根川の隔絶性に起因する関東の東西区分を問題にしている。

これは十六世紀の大名層が共有する「河東」「河西」などの空間認識から発想

されたものであり、この認識は十五世紀までに利根川上流域に成立する「東上野」「西上野」という地域認識と密接に対応しているとす。そして、応永三十四年（一四二七）の洪水をピークに想定される利根川西遷という自然的条件の変化と、十五世紀後半の内乱期に関東の二つの政治的求心力（鎌倉公方と関東管領）が関東南部（鎌倉）から北部（古河と五十子）に移ったという歴史的条件の変化が、東西観念定着の画期であったと理解する。

第二部は「横瀬・長尾領国と両毛国境河川地域」と題して、「新田荘の国境河川地域」、「新田領の形成と渡良瀬川」、「渡良瀬川の洪水と水運」の三章と、さらに補論として「中世仏教の地域的展開と利根川」を配置して、東西関東の境界地域に領域支配を展開した新田岩松氏・横瀬氏・長尾氏の特殊性をとりあげている。ここでは、十五世紀の上野国新田荘に領域支配を展開した岩松氏の権力が、上野と武蔵の国境地域を拠点に活動する一揆的な領主層（猪俣党）に支えられていたこと、中でも利根川（上武国境）と渡良瀬川（両毛国境）の各渡河点を押さえ

た横瀬氏が次第に自立していくこと、そして横瀬氏が足利長尾氏と協調して渡良瀬川の流域機能を独自に掌握し、遂に主家岩松氏をおさえて両毛国境河川地域に固有の領域支配を展開したこと等を明らかにし、下剋的な政治的運動を自然的条件との関係性の中でとらえ直している。さらに、戦国末期の人びとがこの地域を「東北」と認識していたことに注目し、岩松・横瀬・長尾氏が上武・両毛国境地域で展開した領域支配の成立が、伝統的な「東西」に「北（北関東）」を意識させることになる画期であったと総括する。

また第二部と第三部の間に収められた補論「中世仏教の地域的展開と利根川」は、親鸞が廻心した場として重要な上野国佐貫荘の地の、鎌倉・南北朝時代の宗教事情を解明した論文である。従来、あまりかえりみられることのなかった地であるが、この地が関東を東西、そして南北で分けたときにそのつなぎの地域となることが明らかになった。

第三部は「林産資源の利用と地域社会の形成」と題して、「中世村落における

平地林の機能と景観」、「戦国期桐生領の林産資源と生業」、「中世の屋敷林と境内林」の三章に分け、林産資源の管理と利用をめぐる家や公権とのかかわりから地域における「公共」の展開を問題にしている。

具体的には平地の新田領と、山地が卓越する桐生領の林産資源の産出方法の相違、調達方法の特色などを明らかにしている。また、本来的には生産領域として位置付ける必要のない屋敷・境内が、実際には林産資源の供給地として中世を通じて機能していたことを明らかにし、このことから、中近世移行期の地域社会における家の成り立ちを展望している。

本論文の特徴は、二つの視角と方法によって構築されていることにある。一つは領域支配によって生じる地域の成り立ちを大名の地域と地域領主（国人）の地域に分け、双方の関係を具体的に明らかにしようとした点である。この場合、利根川を障壁として強く認識したのはむしろ大名層であったが、大河川の融通性に依拠した国人層による固有の領域、つまり国境河川地域の支配に焦点をあてる

ことで大名層の地域観を相対化しようとした。

もう一つは、資源利用を契機として生じる地域の成り立ちを私的領域に対する公権力の介入という観点から明らかにしようとした点である。この場合、資源の生産・管理機能を私的なものとし、調達・利用する側面を公的なものとし、双方を連携するシステム、すなわち資源の再分配機能として「公共」が成立していくことに注目する。そして、この時代の地域統合が、自然条件に対応した既存の地域を「公共」の論理で取り込みながらはじめて達成できたものとして、やはり大名権力や公権を相対化している。

以上、本論文は、中世の東国を中心に、自然的条件としての河川と樹林に着目し、自然条件への人間社会の対応という論理のなかで中世の地域形成を見直そうとしたものである。

## 論文審査の結果の要旨

本論文提出者の築瀬大輔は、國學院大學卒業後、群馬県立立高等学校教諭、群馬県立歴史博物館学芸員等を勤める中で、群馬県内を中心として広く東日本の社会・生活・文化の歴史を調査研究し、その成果を教育に生かし、また文化財の保護にあたってきており、そのキャリアはすでに二五年を超えている。本論文は、そうした調査・研究の中で得た知見と博搜した史料をもとに、作成されたものである。そのことによって、本論文は、文献史料だけでなく、歴史地理学、民俗学の成果をも取り入れて、中世後期東国の地域構造についての総合的な把握をめざした野心的な研究成果となった。

本論文は、領主論、政治史、軍事史のみならず、環境史、林業・林産資源にかかわる先行研究と史資料を網羅的に収集し、読み込み、また現地を踏査するなどの作業により、利根川という関東の最大河川がもたらした上野・関東の東西の地

域区分・地域認識を明らかにしようとした。そのために、まず上野における利根川流路の西遷の年代を明らかにし、それと陸上交通の変化、つまり上野大道の活性化を関連付けてとらえた点は興味深い。そして叙上のような地域区分が十五世紀半ばに始まる内乱を機に明確に認知されていくと主張している。

このような主張を証明するために、第一部・第二部では、利根川の流路西遷後の旧流路低地帯の地域の領主を「境目の領主」と規定し、その動向を明らかにし、また関東平野内部の大河の境界性に注目し、「越河」が利根川を越えることを意味することを明らかにしたことは説得力がある。そして、利根川、渡良瀬川の渡河点を明確にし、「渡河域」という語をキーワードとして、国境河川地域の領主層の活動や経済基盤を明らかにした点は、評価できる。

とりわけ、渡良瀬川に注目して、「山田郡南部地域」「両毛国境河川地域」を具体的に分析した成果は重要で、それらと横瀬氏、長尾氏の領国形成を関連させた分析も評価できるといえよう。

また第二部の補論である「中世仏教の地域的展開と利根川」は、親鸞が廻心した場とされて仏教史上重要な上野国佐貫荘の地の、鎌倉・南北朝時代の宗教事情を解明した論文である。従来、あまり具体的に述べた論文はみられなかったが、この地が関東を東西、そして南北で分けたときにそのつなぎの地域となることが明らかになったことで、当時の親鸞を支えた東国の信者たちのありようについても、新たな解明が進むといえよう。

そして第三部では、上野における平地林、山林資源の育成・利用の実態を史料から具体的に明らかにした。さらに、そこに資源性と象徴性という視点からの分析を加えたこと、戦国期地域社会論に結び付けようとしたことは意欲的で、今後の展開が期待されるといえる。

ただ、本論文にも残された課題がないわけではない。

中世の関東を東西に区分することは、本論文のもっとも大きな問題提起の一つで、重要な論点だが、東西の地域区分に関する過去の研究の問い直しが十分でな



いように思われること、「古河公方領国」といった他人の使った用語をあまり厳密な検討を加えないまま安易に借用していること、その結果、地域内部の分析、地域の側からの具体的な分析がもっとなされる必要があることは、指摘しておくべきであろう。この点、今後の実証の課題が残されたといえる。

また、第三部を中心とした山林資源をめぐる議論は、まだ史料の収集も十分とはいえず、今後の検討にゆだねるべき点も多く、またそれまでの第一部、第二部とは史料の性格も大きく変わっている。こうした点について、議論を連続させるための配慮がなされなければならぬと思われる。

さらに、河川を挟んだ兩岸地域のありかたを描いていくためには、矢場などのこれまであまり明確になっていない渡河点、渡し場の具体的な姿や、渡し場とながる陸上交通路の性格付けなども明らかにしていくことが必要であろう。そのためには、歴史考古学の成果の有無などにも、もっと目を向ける必要があるといえよう。

以上、今後の研究の一層の進展に期待すべき点も残されるとはいえ、中世後期社会を日本の地域形成史上の画期としてこれまでに無い視点から捉え直そうとした点はきわめて独創的であり、本論文の提出者築瀬大輔は、博士（歴史学）の学位を授与せられる資格があるものと認めるものである。

平成二十六年二月十五日

主査 國學院大學教授 千々和 到 ①

副査 成蹊大学名誉教授 池上 裕 子 ①  
國學院大學大学院兼任講師

副査 東京大学史料編纂所教授 榎 原 雅 治 ①  
國學院大學大学院兼任講師